

私の出会った

紀野 恵

歌人

阿波のお姫様、紀野恵。この人はどんな日常を過ごしているのだろうか。見てみたいが、

まだ私は四国に行ったことがない。

彼女は天才少女がそのまま大きくなったまねな人である。歌を詠むために生まれて来たとされる歌人は何人もいるが、紀野恵ほど幸福な感じてそれが確信できる例はない。

紀野恵と初めて会ったのは、東京駅の近くのあなご寿司のお店だった。紀野さんと同じ「未来」の加藤治郎さんが、私を引き合わせてくれたのである。おまけに加藤さんは「めつたにないことだから」とすっかり奢ってくれた。食事のあと、紀野さんの泊まっているステーションホテルに行き、ラウンジでお酒を飲んでもう少し話した。

何年ぐらい前のことだっただろう。話の内容はもうほとんど覚えていないのだが、たっ



紀野 恵

水原紫苑

たひとつ記憶に残っているのは高校時代のクラブ活動の話だった。あまりにもびったりな話で、紀野さんは百人一首のクラブに入っていたのだった。そして、加藤さんと私の前で、美しい声で百人一首の歌を朗唱してくれた。ゆるやかな関西のアクセントが何とも優雅だった。関東の荒い風土に育った私は、まさに都のお姫様をさらって来た盗賊のように聞き惚れたのだった。

その時、私は以前から欲しかった紀野さんの第一歌集『さやと戦げる玉の緒の』を購入したい旨を伝えた。数日経つと、お洒落な水色の新書判の歌集が送られて来て、包みの中にはお庭で採れたキーウイが入っていた。南国の微風が快く感じられる贈り物だった。

この歌集は今も私の愛読してやまない一冊である。もちろんそのあとにも好きな歌は沢

山あるが、こんな素晴らしい歌集を十代で出したということはそれだけで価値がある。

やぐるまの青さがふいとあたらしくなるあしたかなうすくもりびの

過去形は螢のごとく明滅すさういふ夜に
ライターを読む

この秋もつひに過ぎなば汝が指のかすかな
エンタシスを想はむ

言葉が新しく、軽やかで楽しい。重苦しいものだけが生の真実ではないのだ。

紀野さんに再会したのは、岩波書店主宰の「へるめす歌会」の席上だった。彼女はいつも飛行機でやって来ていた。批評の時間はほとんど口を開かず、しとやかに座っていたが、ひとたび話し始めると、ためらいなく一撃で相手を倒すのが面白かった。

「へるめす歌会」も『短歌パラダイス』の刊行で終わり、また紀野さんと会う機会がなくなってきたが、遠くからそつと考えているのも悪くはない。おばあさんになってもお姫様のままでたおやかに歌いつづけそうな紀野恵という同時代の歌人の、光について闇について恋について。

(みずはら・しおん「中部短歌」所属・

「NHK歌壇」番組進行役)